

# 外部検定利用入試 2022年は424大学！

国公立大はほぼ変わらず、私立大で増！

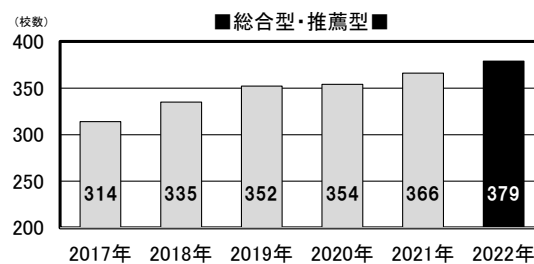
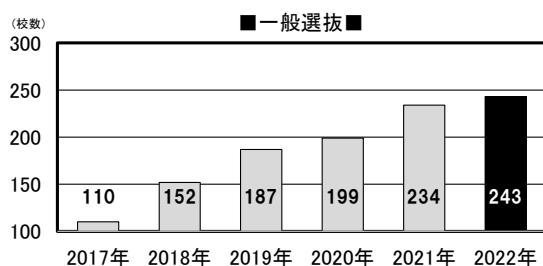
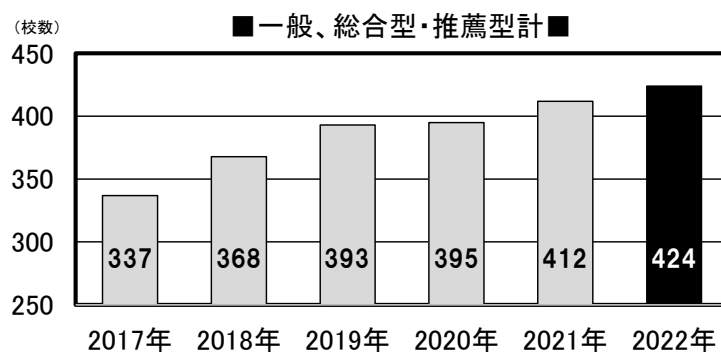
旺文社 教育情報センター 2022年2月25日

2022年入試で英語の外部検定(外検)を利用した大学は424校で全体の55.6%となった。入試改革が実装された昨年と比べ、今年は各大学の入試全般の変更は落ち着いているが、それでも外検利用大は増加した。一般選抜で外検を利用する大学が出始めた2015年の「外検入試元年」以降、外検利用大は7年連続で増え続けている。

※本記事のデータは、全大学の募集要項、入試ガイド、HPなどを調査したもの。専門職大学、通信のみの大学、文科省所管外の大学校を除く。推薦型は公募制を集計。

## ●外検利用大学数

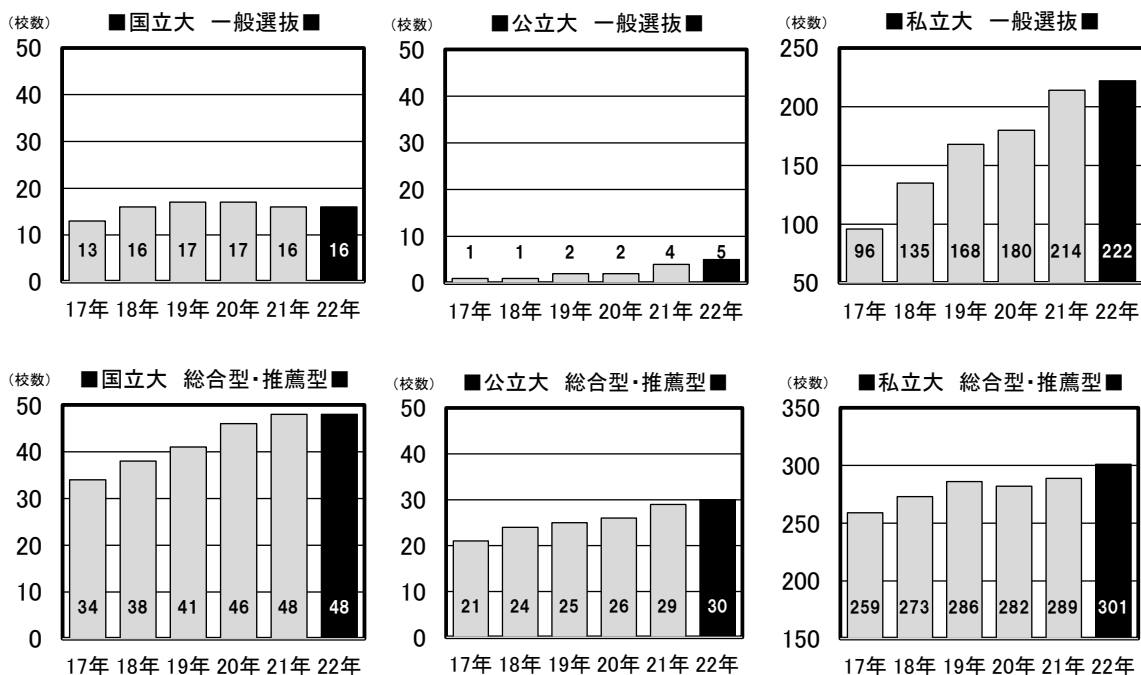
【全大学合計】



2022年の利用大学数は、一般、総合型・推薦型の合計で424校(全大学の55.6%)。一般選抜は243校で31.9%、総合型・推薦型は379校で49.7%。いずれも毎年増加している。

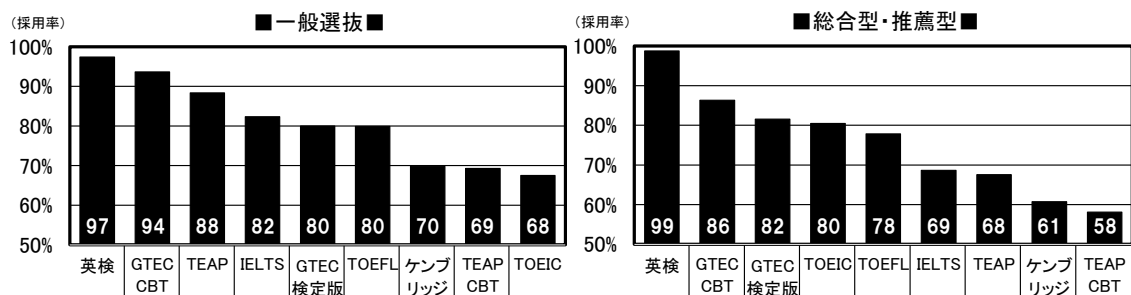
総合型・推薦型での利用が多いのは、特に推薦型では伝統的に各種資格試験の利用が行われてきたため。「外検入試」という概念が出始めたときに、これらのうち英語系資格のものを一斉にカウントしたため、一般選抜よりもはるかに多い数字となっている。

## 【国公立大別】



国公立大別に見ると、今年も増加の要因は私立大であることがわかる。国公立大はほとんど変化が見られない。外検利用大の割合は、一般選抜は「国立大=19.5%」「公立大=5.3%」「私立大=37.9%」、総合型・推薦型は「国立大=58.5%」「公立大=32.3%」「私立大=51.3%」、合計は「国立大=61.0%」「公立大=32.3%」「私立大=58.6%」となる（合計は一般、総推の両方を行っている大学があるため、単純に両方の割合を足した数値にはならない）。

## ●各外検の採用率



※全国の大学で行われている外検入試の中で、各外検が採用されている割合を算出。

※原則、学科単位で集計。1つの学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用内容が同じなら「1」、異なるなら別々に計上。

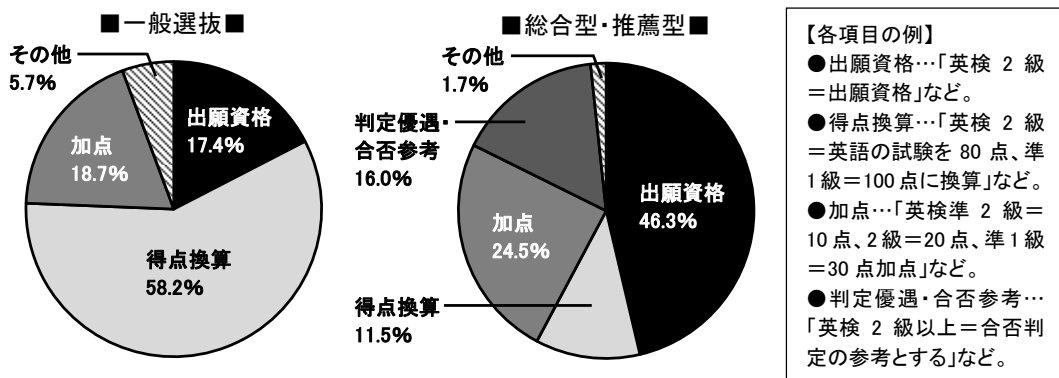
※採用されている外検は募集要項や入試ガイドなどに記載されているものをすべて計上。「それに準ずる外検でも出願可」のような記載の場合は、すべての外検が採用されているとして計上。募集要項等の文面から記載以外が有効と読み取れない場合は採用としていない。

※各外検は細かなテストの種類なども含む。例：TOEFL…iBT、PBT、ITP、iBT Home Edition など。

採用率とは、全国の大学の外検入試でそれぞれの外検が利用可とされている割合だ。1位は毎年英検でほとんどの大学で利用できる。2番目に多いのが GTEC CBT。GTEC は多くの高校で実施されているが、GTEC CBT はこれとは異なるテスト（学校外の公開会場で実施）。高校で実施されているのは GTEC 検定版（またはアセスメント版）で、これだと利用できる大学入試は 8 割程度となる。

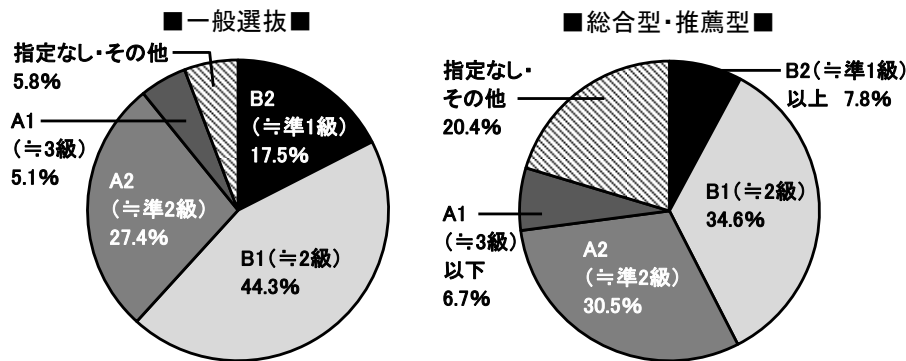
● 利用方法、利用できるレベル

【外検の利用方法】



※外検入試の中での外検利用方法の割合。「出願資格かつ得点換算」などは別々にカウント。

【利用できる外検のレベル(最易レベル)】



※各大学の外検入試で利用できる最易レベルを集計。

例①: 得点換算で「A2=80点、B1=90点、B2=100点」⇒「A2」で集計。

例②: 「B1が出願資格で、B2はさらに10点加点」⇒「B1」で集計。

※調査対象とした外検は英検で、級や CSE スコアを CEFR に換算。

外検の利用方法、利用できるレベルは例年と変わらない。利用方法は「一般選抜 = 得点換算」「総合型・推薦型 = 出願資格」が中心で、レベルは英検「準 2 級 ~ 2 級」がボリュームゾーン。総合型・推薦型の方がレベルは下に広く、レベル指定がされていない入試も一定割合ある。

## ●「できるだけ多くの外検を利用」という方針の検証

前述の各外検の採用率は、以前はもっとバラバラだった。それがここ数年は均一化の方向に向かっている。要因は文科省が2017年7月に発表した、2021年の入試改革に関わる「実施方針」だ。ここで文科省は各大学に対し、できるだけ多く外検を利用するように求めた。

さまざまな外検を併用するには当然、異なる外検のスコアを比較できる共通の「ものさし」が必要になる。それがCEFRだ。文科省は2018年3月、各外検のスコアとCEFRが一覧で見られる「CEFR対照表」を発表。これをもとに外検入試を行う大学が一気に広がり、多くの大学がこの表に掲載された外検をすべて利用可とした。

CEFRはA1～C2の6段階の成績表示なので、特に得点換算を行う外検入試では、日本の大学入試で課題となっている「1点刻みからの脱却」にも一役買った。つまり大学は「さまざまな外検を利用するために ⇒ CEFRを利用せざるをえず ⇒ 結果的に段階別の成績を利用」となった。

一方、特に私立大には「定員管理の厳格化」の政策が重くのしかかる。段階別の成績を利用すれば合否判定はザックリしたものになる。しかし入学定員を一定割合オーバーすれば助成金は減らされる。「1点刻みからの脱却」と「定員管理の厳格化」は相容れない。

しかし結局、大学がさまざまな外検を利用可としても、受験生が利用する外検は右のグラフのとおり英検に集中している。受験生が外検を選ぶポイントは、①「国産」の外検、②検定料が安い、③試験会場が近い、④多くの大学で利用できる、の4点になる。これに当てはまらない外検は、高校生が大学入試で利用するにはなかなか難しい。

フェリス女学院大は今年、「一般入試3月期」で「英語外部検定試験利用型」を導入した（英語英米文学科、国際交流学科）。これは従来の英語1科目入試を外検でも可とするもので、利用できる外検は英検のみ。大学は英検のCSEスコア※に独自の係数をかけて100点満点に換算するので、外検を1点刻みで点数化し、両方式の受験生をあわせて合否判定することが可能となる。受験生にとってはコロナ禍の中、試験を受けに行かなくて済むメリットも大きい。これは英検1本に絞りを、そのCSEスコアを利用することで可能となった入試だ。今後はこうした大学が増えるのかもしれない。

※英検は級の合格、不合格以外にCSEというスコアで成績表示される。

国がかつて示した「できるだけ多くの外検を利用」という方針は、出された当時はこれで良かった。受験生がどの外検を使うのかわからなかったためだ。しかし受験生の使う外検がかなり限定的であることがわかった今、この方針の意義はほとんどなく、段階別の成績で合否判定せざるを得ない大学にとって代償は大きい。

(2022.02 石井)

【参考】受験生が利用した外検  
(2021年一般選抜/131大学、78,735人集計)

